



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



映画を用いた日本語教育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2013-11-29 キーワード (Ja): 映画, 日本語教育, 工学部留学生, 人間性, 異文化理解, 自文化理解 キーワード (En): 作成者: 吉村, 弓子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2691

映画を用いた日本語教育

吉村 弓子

Teaching Japanese through Movies

Yumiko YOSHIMURA

要旨: 本稿は、豊橋技術科学大学工学部留学生を対象に豊かな人間性を育むことを目標として実践した、映画を用いた日本語授業の報告である。学生たちは映画の日本語を聞きとり、表情・心情や人間関係を読み取り、日本の文化・社会を理解し、母国の言語・文化・社会を再認識したことが明らかになった。

キーワード: 映画 日本語教育 工学部留学生 人間性 異文化理解 自文化理解

1. はじめに

外国語教育の重点が文法訳読から聴解会話へとシフトし、また、技術開発がVTRやDVDを誕生させたことにより、授業に視聴覚教材を導入するようになって久しい。

なかでも映画が教室で観られるようになった意義は大きく、英語教育では1995年に映画英語教育学会が設立された。スクリーンプレイ出版編集部(1995)には設立趣意書が掲載されており、映画の持つ以下の特性に注目していることがわかる。

- 1) 書かれた原稿を読んだものではなく、臨場感あふれる本物の英語である
- 2) 日常生活、ビジネス、アドベンチャーまで多様な場면을扱っている
- 3) 表情、コンテキストなどが映像によって伝わってくる
- 4) 音声・映像・ストーリーから文化を読み取ることができる
- 5) 柔軟な教材開発が可能である

1) について補足すれば、「本物の英語」といっても、ドキュメンタリーでない限り書かれた脚本を音声化した作り物にすぎない。しかし、いわゆる英語学習用として作成された教材と比較すれば「本物らしい英語」である。一方、現実の会話は文法や発音が間違っていたり不明瞭であったりするため、正真正銘の「本物の英語」ではあるが教材として使いにくい。このような意味で、映画は、外国語教育の観点からは「本物の英語」と認める価値があると考えられる。5) に関しては、学会のサイト(2009)では、教育界と映画界、関連企業との協力関係のもとで台詞をCD化するなど、その後の進展が著しいことが伺える。

日本語教育では、2006年度日本語教育学会春季大会で「映画・アニメ・マンガー日本語教育の映像素材」と題するシンポジウムが開催された。背景は次のようなことである。日本語学習者や留学生が日本に興味を持ったきっかけは、古くは伝統文化や経済成長であったが、

近年では映画、ドラマ、アニメ、マンガ、音楽、ファッションなどのサブカルチャーが主流となっている。したがって、教師としてはサブカルチャーを授業に導入して学習の動機付けにしたいと考えるが、実は教師はサブカルチャーに詳しくないため何を教材としたら良いのかわからない。また、学習項目、教科書・教材、教授法、評価法なども確立されておらず、そもそも楽しいだけで良いのかという疑問もある。そこで、このシンポジウムでは、映画・アニメ・マンガという映像素材にしばって日本語教育のあり方を検討するという趣旨であった。ディスカッションでは映像の教材としての有効性が確認され、その特性は映画英語教育学会が挙げたように、1) 本物の日本語、2) 多様な場面、3) 非言語情報、4) 文化・社会情報、とまとめることができる。5) 柔軟な教材化については触れられなかったが、日本一国における英語教育を考える場合とは状況が異なり、世界各国における日本語教育について検討する際には各国の言語、文化、視聴覚機器、著作権等の状況が多様であるため、一概に論じることが困難であったと推察する。

吉村(2004)は、映画の娯楽性・芸術性が学習者の心を惹きつけることに着目し、2002年に豊橋技術科学大学工学部の授業に映画を導入した経緯を述べた。工学部の留学生は授業・実験やアルバイトで多忙な日々を送り、ともすればすぐ役に立つ知識を求める傾向がある。しかし、このような学生だからこそ、登場人物の気持ちや人間関係、テーマを読み取る授業は、情操や人間性を豊かにする全人教育として意義が大きいのではないか¹。また、彼等は母国で日本のアニメやドラマを見た経験はあっても映画までは観ておらず、来日後も劇場ではアメリカ映画を見ていることが判明したため、日本留学生としての教養という意味で日本映画を見てもらいたいという動機もあった。もともとのライフスタイルや趣味を否定するものではないが、日本映画について語ることができれば様々な場面で話題を提供し、大学の友人、アルバイトの仲間、国際交流団体の人々等といっそう親しくなれるのではないか。また、映画を通して学んだ日本の文化や社会について帰国後も語る言葉を持っていれば、他の国ではなく日本に留学した意味があるのではないかと考えたのである。本稿は2002年度から2009年度までの8年間の授業実践を振り返り、その意義を吟味するものである²。

2. 授業の概要

この科目は、工学部全課程3年次・4年次の留学生を対象とする選択科目で、履修単位は

¹ 豊橋技術科学大学は工学部だけの単科大学で、実践的・創造的な能力を備えた指導的技術者・研究者の育成を教育目的としている。すなわち、専門分野で優秀であるだけでなく、技術者・工学者として人間性の開花、自然との共生、国際協調的な社会の実現に貢献できる人材を育てることを目的としている。

教育課程は一般基礎科目と専門科目に、一般基礎科目は自然科学の分野と人文・社会の分野に分かれ、人文・社会の分野は、透徹したものを見る目、繊細で温かみのある感性、多元的な思考能力、グローバルな視野を涵養することを目標としている。

² 吉村・宮副(2009)では、映画批評を海外の日本語学習者とメール交換する、ヴァーチャルな教室の授業成果(2003年度2学期)を紹介したが、ここではリアルな教室の実践に限定して報告する。

一般基礎科目に代替して卒業要件に認定される。大学は3学期制を採っており、各学期は10週の授業期間と1週の定期試験期間から成る。授業1コマは75分である。授業の方針としては、できるだけ広範囲の作品を見ることを目標とし、約3週で1本の映画を終えるペースで各学期に3本の映画を選定した。

授業の概要は、8年間基本的に同様である。参考までに、2009年度1学期のシラバスを表1に示す³。ただし、科目名称、単位数、教員連絡先、オフィスアワーなどの情報は略す。

表1 シラバス (2009年度1学期)

授業の目標 日本映画を楽しもう。
授業の内容 日本映画の言語表現、言外の意味、背景となる事柄、日本人の心情などについて考える。毎回、終わりの10分間にミニ・レポート(質問・感想・コメントなど)を日本語で書いて提出してもらおう。ミニ・レポートに書かれた質問は、翌週の授業で回答する。 04/17・04/24・05/01 『シコふんじゃった。』1991年 周防正行監督 103分 05/15・05/22・05/29 『メッセンジャー』1999年 馬場康夫監督 118分 06/05・06/12・06/19 『フラガール』2006年 李相日監督 120分
関連科目 600時間程度の日本語学習を経験していること
教科書、主要参考図書、参考文献(論文等)等 欠席した場合は、授業で扱った箇所を各自で視聴して、次回の授業時にミニ・レポートを提出すること。 映画の原作・評論など、関連図書を図書館に置いてあるので、参考に読んでほしい。
達成目標 (1) 日本映画の台詞(せりふ)を聞き取ることができる。 (2) 日本人の身振り、表情、心情、人間関係を理解することができる。 (3) 日本の社会・文化に興味を抱くことができる。 (4) 母国の言語表現・社会・文化等を客観視することができる。
成績の評価法(定期試験、課題レポート等の配分)および評価基準 評価法: 授業への貢献30%、ミニ・レポート70%で評価する。 評価基準: 授業、ミニ・レポートは、達成目標全ての観点から評価する。上記評価法による合計点数(100点満点)が、80点以上をA、65点以上をB、55点以上をCと

³ シラバスは全学共通の形式で作成している。その項目は、2004年度から日本技術者教育認定機構(JABEE)による技術者教育プログラムの審査に対応して、「オフィスアワー」と「JABEEプログラムの学習・教育目標との対応」の2項目が追加された他は、8年間同一である。

する。

出席：欠席は、やむをえない場合 3 回まで許される。

4 回欠席した場合は単位を認定しない。

15 分以上の遅刻・早退は、欠席とみなす。

15 分未満の遅刻・早退 3 回は、欠席 1 回とみなす。

JABEE プログラムの学習・教育目標との対応

(A) 幅広い人間性と考え方

人間社会を地球的な視点から多面的にとらえ、自然と人間との共生、人類の幸福・健康・福祉について考える能力

(E) 国内外において活躍できる表現力・コミュニケーション力

論文、口頭および情報メディアを通じて、自分の論点や考えなどを国の内外において効果的に表現し、コミュニケーションする能力

(F) 最新の技術や社会環境の変化に対する探求心と持続的学習力

社会、環境、技術等の変化に対応して、生涯にわたって自発的に学習する能力

「関連科目」は、あらかじめ要求される知識や既修科目について示す項目で、他の日本語科目とのバランスや海外からの編入学生を考慮して 600 時間程度の日本語学習歴を設定した。「達成目標」4)「母国の言語表現・社会・文化等を客観視することができる。」は、当初から含意してはいたが、明確に示したのは 2005 年度以降である。「成績の評価法および評価基準」で遅刻・早退について明記したのは、2008 年度からである。

3. 映画の選定

表 2 は、選定した映画のタイトルと受講者数（内数は単位履修者⁴⁾）を学期別に示したものである。

どの年度も 3 学期の受講者が減っているが、これは豊橋技術科学大学では一般基礎科目全般に見られることである。日本人学生も含め、学生たちは 3 年次 2 学期までに基礎科目の履修を終え、3 学期から専門科目に専心する傾向がある。2005 年度は 3 学期間連続して受講者がなかった。その要因は、より興味深い科目が他にあった、出席を取らない科目が好ましかった等が推測できるが、時間割が 1 限（8:30 開始）と朝早いことも関係したと思われる。そこで、2006 年度から 3 限（11:20）に変更した。2006 年度 2 学期から受講者数が急増したのは、時間割変更の効果であるとも考えられるが、他の科目の影響という可能性もあり、また高等専門学校から 3 年次に編入したマレーシア人留学生が増えたことも関係すると思われる。受講者の日本語能力は、中級～上級（日本語能力試験 2 級・1 級相当）であった。

⁴⁾ 単位を履修しなかったのは交換留学生等で、初めから単位取得を目指していなかった。単位取得を希望しながら不合格に終わる受講生はなかった。

表2 学期別選定映画タイトルと受講者数

年度	学期	映画タイトル	受講者数
2002	1	『シコふんじゃった。』『Love Letter』『金融腐蝕列島[呪縛]』	6 (1)
	2	『サラリーマン専科 単身赴任』『ウォーターボーイズ』『おもひで ぼろぼろ』	3 (1)
	3	『(ハル)』『ナビィの恋』『耳をすませば』	0
2003	1	『シコふんじゃった。』『Love Letter』『ゴジラ』	6 (3)
	2	『ウォーターボーイズ』『GO』『おもひで ぼろぼろ』『鉄腕アトム第1話』	4 (4)
	3	『Shall We ダンス?』『学校』『男はつらいよ 第15作 寅次郎相合い傘』	2 (2)
2004	1	『Love Letter』『ウォーターボーイズ』『おもひで ぼろぼろ』	2 (2)
	2	『GO』『メッセンジャー』『シコふんじゃった。』	2 (2)
	3	『みんなのいえ』『チルソクの夏』『お受験』	1
2005	1	『Love Letter』『シコふんじゃった。』『チルソクの夏』	0
	2	『ウォーターボーイズ』『GO』『メッセンジャー』	0
	3	『みんなのいえ』『Shall We ダンス?』『お受験』	0
2006	1	『Love Letter』『シコふんじゃった。』『チルソクの夏』	3 (3)
	2	『ウォーターボーイズ』『GO』『メッセンジャー』	12 (12)
	3	『みんなのいえ』『Shall We ダンス?』『スーパーの女』	9 (9)
2007	1	『シコふんじゃった。』『Love Letter』『笑の大学』	17 (17)
	2	『ウォーターボーイズ』『GO』『スーパーの女』	16 (15)
	3	『踊る大捜査線 The Movie』『学校』『出口のない海』	0
2008	1	『シコふんじゃった。』『メッセンジャー』『踊る大捜査線 The Movie』	19 (18)
	2	『スウィングガールズ』『GO』『スーパーの女』	17 (17)
	3	『みんなのいえ』『Always 三丁目の夕日』	2 (2)
2009	1	『シコふんじゃった。』『メッセンジャー』『フラガール』	12 (12)
	2	『スウィングガールズ』『Always 三丁目の夕日』『スーパーの女』	15 (11)
	3	『みんなのいえ』『踊る大捜査線 The Movie』『GO』	7

学生の反応を見ながら試行錯誤を重ね、落ち着いた映画選択基準は以下の通りである。

- 1) 共通語、あるいは比較的わかりやすい方言を用いている
- 2) ロケ地、セット、衣装、スポーツ、ダンスなど、映像の魅力が溢れている
- 3) 時代背景が理解しやすい
- 4) 分野・テーマが平易かつ興味深い

- 5) 暴力・裸・性行為などのシーンが含まれていない
- 6) 監督・俳優が偏らない
- 7) 人気がある
- 8) 評価が高い

1) 『おもひで ぼろぼろ』は山形市、『スウィングガールズ』は米沢市、『Always 三丁目の夕日』は青森県、『フラガール』はいわき市、『サラリーマン専科 単身赴任』は大阪府、『Love Letter』は神戸市、『チルソクの夏』は下関市の方言が使われている。しかし、映画の台詞は方言の特徴を活かしつつ、他の地方の日本人が聞いても理解できる程度に共通語化してある。そのため、あらかじめその方言の特徴を説明してから視聴させれば、日本語上級者にはわかりやすいようであった。中級者にも配慮し、粗筋を確認しながら進めていった。

2) 『Love Letter』『スウィングガールズ』の雪景色、『おもひで ぼろぼろ』の田園風景、『メッセンジャー』の都会の景色などは広大で美しく、学生たちも魅了されていた。中学・高校の教室、部室、職員室、図書室などの様子を理解させるには、『Love Letter』『ウォーターボーイズ』『スウィングガールズ』『チルソクの夏』が役に立った。『学校』は夜間中学校、『GO』は朝鮮学校を覗くことができた。台詞なしに映像と音楽だけでクライマックスを描く作品は、日本語の聞きとりが苦手な学生も感動を分かち合うことができ、『シコふんじゃった。』では相撲、『ウォーターボーイズ』ではシンクロ、『スウィングガールズ』ではジャズバンド、『フラガール』ではフラダンス、『Shall We ダンス?』では社交ダンス、『メッセンジャー』では自転車を堪能した。逆に『笑の大学』は、大半のシーンが同じ室内で展開されるため、日本語力が低い学生は展開を追うことが困難で退屈になった。

3) 『Always 三丁目の夕日』は1958(昭和33)年、『フラガール』は1965(昭和40)年を設定とした物語であるが、それぞれ時代背景を説明した後で視聴させたところ問題は生じなかった。一方、『たそがれ清兵衛』を見せた際は、学生たちの幕末に関する知識が皆無に近く、解説すべきことが多すぎた。庄内地方の方言が難しいこともあり、1日のみで取りやめて他の作品に変更した。

4) 『金融腐蝕列島[呪縛]』は、総会屋への利益供与に対して立ち上がった銀行員たちを描く社会派で、俳優陣の演技も生き活きとした作品である。しかし、緊迫感のある台詞は学生たちには速くて聞き取りにくく、また金融や検察の用語が難解であったため、翌年から選定しなかった。『笑の大学』は戦時中の演劇脚本の検閲を扱ったコメディで、戦争と国民、表現の自由、制約の中の仕事などをテーマと捉えることができる。だが、2)で述べたように、場面の展開が少なく言葉にかかる比重が大きいため、中級の学生には難しかった。以後、選定候補から外した。

『鉄腕アトム 第1話』は1963年にテレビ放送されたアニメで、日本でロボットの研究開発が発展する原動力となっているともいわれ、人間とロボットの共生という今日的テーマを考察することができる。『ゴジラ』は1954年に劇場公開された特撮怪獣映画で、海底に眠る恐竜が水爆実験でよみがえり東京を襲来するという物語である。科学技術の危険性、日本人の核に対する感情を扱うことができる。学生が最新作の視聴を希望するので一度ずつしか使

わなかったが、テーマとしては選定に値すると今でも考えている。

5) 『GO』は喧嘩による流血やナイフによる刺殺という衝撃的なシーンが含まれるが、在日朝鮮人の高校生を主役として日本の民族問題を軽快なリズムで描いている。『踊る大捜査線 The Movie』は殺人事件を扱っており容疑者の母親が刑事を刺す場面もあるが、警察を会社組織として捉え、しかもコミカルに描いている点がユニークである。どちらも、このようなシーンがあることを学生たちにあらかじめ説明し、見たくなければ他の作品に変更するという選択肢も提供した上で視聴した。

裸や性行為はどの作品にも出てこない。ただ、『シコふんじゃった。』の男性がまわしを締めた姿は、女子学生には恥ずかしかったようだ。キスは『Love Letter』『チルソクの夏』『GO』にあるが、あまり抵抗はなかった。『GO』『スーパーの女』はベッドに入るまでのシーンがありドキドキさせられたが、学生のコメントによると許容できる範囲であった。未婚の男女が手をつないで歩いたり2人きりでいることさえ不道德という宗教的・文化的価値観を持つ学生もあるが、外国映画は別の文化なので見ることは構わないと捉えていた。また、お酒を飲むシーンが多く映画にあったので、飲酒を戒める宗教の教徒がいる場合は、ひとこと断ってから見せた。

6) 日本映画の多様性を知ってもらうため、監督と主演俳優が偏らないようにした。『シコふんじゃった。』と『Shall We ダンス?』は周防正行、『ウォーターボーイズ』と『スウィングガールズ』は矢口史靖、『笑の大学』と『みんなのいえ』は三谷幸喜、『チルソクの夏』と『出口のない海』は佐々部清の監督作品であるため、それぞれ同年度に重複して選定しないよう注意した。『学校』と『男はつらいよ』は山田洋次の監督作であるが、作風が全く異なるので、あえて続けて視聴した。『Shall We ダンス?』と『笑の大学』は役所広司が主演であるため、別の年度に採用した。

7-8) 教室外の日本人や母国の人との話題としてもらうためには、人気があり評価が高い映画が妥当であると判断した。人気は、観客動員数や興行収入、配給収入を参考にした。評価は、日本アカデミー賞やキネマ旬報読者投票などに依った。

4. 授業の成果

授業では重要な語・表現や粗筋を確認し、大意を掴んで自分なりの意見を持つように指導した。毎回終わりの10分間にミニ・レポートを書かせ、翌週の授業で意見や質問を紹介した。そうすることで知識や意見を共有し、また、お互いの刺激とすることを狙った。特に、粗筋をまとめるだけで自分の意見やコメントにまで発展できない学生に対して、どのようなことを書けばよいのか参考になればと考えた。学生たちの意見・コメントをまとめ、以下に紹介する。

『Love Letter』では、制服、入学式、クラス替え、日直・図書委員などの仕事、自転車置き場での恋の告白など中学校生活が描かれており、母国と全く同じであることに新鮮な驚きを覚えた学生もいた。『チルソクの夏』『ウォーターボーイズ』『スウィングガールズ』では高校の部活動を扱っていて、仲間と好きなことをする楽しさに共感していた。高校時代に戻り

たい、楽器を習っていたが止めてしまったのでまた始めたい、というコメントもあった。また、部活動が母国よりも盛んで日本の高校生は幸せだ、という指摘もあった。実際のところ進学校でも部活動に熱心な高校は少なくない。「知育・徳育・体育」「文武両道」という言葉にも表れていることを教示した。

しかし、趣味にも他人に知られるのは恥ずかしいものがあることが、映画を通じてわかってきた。『ウォーターボーイズ』では男子高校生がシンクロに熱中していくが、彼女にはなかなか言えないでいる。『Shall We ダンス?』では中年サラリーマンが社交ダンスの魅力にとりつかれていくが、家族にも同僚にも秘密にしている。その気持ちは理解できるし母国でも同様だという意見もあれば、そのような固定観念にはとらわれず男性も女性も好きなことをすればよいという主張もあった。

『シコふんじゃった。』は大学の弱小相撲部をモチーフとしており、相撲が日本の国技であること、土俵から出るか足の裏以外の部分に土がつけば負けとなること、力の強い者が勝つとは限らず技（わざ）が重要であることを改めて学んだ。伝統的なスポーツや芸能が若者に人気が無いのは母国でも同様であり、古いものを見直す必要性を感じた者もあった。

『みんなのいえ』は若い夫婦がマイホームを建てる物語で、留学生活では知る機会のない地鎮祭や上棟式という風習を見ることができた。『スーパーの女』は駄目なスーパーマーケットを立て直す話で、学生たちもふだん買い物をしているスーパーの裏側を知り、商売の難しさや食の安全について考えるきっかけとなった。また、スーパーというごく身近なものからこのような映画を作るという発想に、日本映画の魅力を感じる学生もいた。『メッセンジャー』は自転車で書類や小荷物を運ぶ自転車便を扱っている。自転車便は都会で展開された仕事であるため学生たちは見たことも聞いたこともなかったが、母国でも営業できるのではないかとビジネスの可能性を見る者もあった。また、荷物を届ける苦勞を知って、これまで宅配便のドライバーに何の言葉もかけなかったことを反省し、今後は「ありがとうございました」「ご苦勞さま」と言いたいとコメントした学生もいた。

『Always 三丁目の夕日』と『フラガール』では、40～50年前の暮らし向きが今とはずいぶん違って質素であることに驚いていた。しかし、前者にはテレビを購入して近所の人たちを招待し、皆で一緒に見て楽しむ場面などがあり、ほのぼのとした人付き合いも実感していた。また、中学を卒業して集団就職する件については、15歳ぐらいで働くのは早いのではないかと初めは反応したが、母国でも50年前は同じだったかもしれない、と判断を留保し再検討する様子を見せた。

『フラガール』では、フラダンスのキャラバン公演中に父親が落盤事故に遭い、死に目にあえないというエピソードがある。辛い気持ちを抑えて笑顔を作り、応援してくれていた父のためにも踊りぬくことでプロ意識と仲間意識が芽生えていく感動のシーンである。しかし、学生たちは、公演は中止してすぐに帰るべきだ、親の看病や死に立ち会うことは何より大事で、そうしなければ一生後悔することになる、と考えていた。もちろん日本でも家族は大事であり、予定を変更したり他の人に代わってもらえる場合はそうするが、ハワイアンセンターのオープンを抑えたキャンペーンという重大な局面を考えると、公演中止の損害は大きく

おそらく誰も中止しないだろうと説明した。文化の違いを如実に認識することとなった。

『踊る大捜査線 The Movie』には、警視庁の東大出身者と東北大出身者の出世争いの場面があり、出身大学と出世の関係を初めて知って驚いていた。僕はこの大学に入学して良かったのだろうか、と将来に不安を覚えた学生もいた。しかし、これは官僚組織でのことで、民間企業では学閥、資格、実力、縁戚関係など、出世の要素はさまざまであると解説した。また、学生たちは母国では実力さえあれば良いと言うが、実際には社会経験がないため実態をよく調査してみる必要があるかもしれないことを示唆しておいた。

『GO』では、在日朝鮮人の存在を初めて知った学生がほとんどだった。韓国の留学生でも在日朝鮮人・韓国人についてはあまり知識がなく、日本における民族問題の現状について学習する機会となった。中国系マレーシア人の学生からは、自分自身も国で同じような経験があり民族差別はどこにでもあるという指摘があった。

以上のように、学生たちは授業の達成目標であった、1) 台詞、2) 日本人の身振り・表情・心情・人間関係、3) 日本の文化・社会、4) 母国の言語・文化・社会、に対して大いに興味関心を示し、理解を深めていったことが見て取れる。

5. 今後の展望

映画を用いた授業は一定の成果を収めたと自己評価しており、学生の授業アンケートでも高い満足度が示されている。ただ、授業を始めた当初の期待として、授業で見た映画について日本の友人たちと語り合っほしいということがあった。この点については実態が明らかではないので、追跡調査を行いたい。日本の友人や母国の友人・家族と映画について話すことを宿題にする等、積極的な仕掛けも検討したい。

参考文献

ATEM 映画英語教育学会 公式サイト、1995、<http://www.atem.org/>、2009年11月参照。

スクリーンプレイ編集部編、1995、『映画英語教育のすすめ』、スクリーンプレイ出版。

谷口聡人・窪田守弘・門脇薫・西隈俊哉・築島史恵・中道真木男、2006、「映画・アニメ・マンガー日本語教育の映像素材ー」、『2006年度日本語教育学会春季大会予稿集』、19～46ページ。

吉村弓子、2004、「キムタクのように日本語を話したい学習者のみなさんへ」、香港日本語教育研究会『日本学刊』、第8号、119～127ページ。

吉村弓子、2005、「広い世界を見ろ。そして自分で決めろ」、香港日本語教育研究会『日本学刊』、第9号、77～82ページ。

吉村弓子・宮副ウォン裕子、2009、「日本と香港をつなぐヴァーチャル教室の映画批評交換

ー異文化理解における映画の効果と外国人留学生の役割ー」、北海道言語研究会『北海道言語文化研究』、第7号、29～40ページ。

執筆者紹介

氏名：吉村弓子

所属：豊橋技術科学大学 留学生センター

Email：yumiko@tut.jp